

四月の道知事選で、自民党と公明党が鈴木直道夕張市長（三七）を推薦し、立憲民主党、国民民主党などが石川知裕元衆院議員（四五）を推す、与野党対決の構図がようやく固まった。ただ与野党とも、候補擁立を巡って激しく混乱し、道連執行部の指導力のなさを露呈した。

関係者の話を総合すると、自民党道連の吉川貴盛会長と高橋はるみ知事の間では昨年早い段階で、高橋はるみ知事の五選不出馬と参院選転出、鈴木氏の知事選出馬というシナリオが描かれていたようだ。鈴木氏は、全国唯一の財政再生団体のトップとして赤字解消や、JR石勝線夕張支線の廃止を進めた手腕への評価に加え、二〇一一年の初当選当時は全国最年少市長としてマスコミなどへの露出も多く、「勝てる候補」として白羽の矢が立てられた。

ただ、このシナリオが表面化したのは、昨年十二月に高橋知事が五選不出馬を表明してから。すると、自民党道議や市町村長、経済界から「北海道のトップとしては若すぎる」「国の言いなりになって借金を返済してきただけ」といった批判が噴出。これに「首長らの酒席でお酌をしない」など言いがかりに近い声も加わり、国土交通省の和泉晶裕北海道局長（五七）への待望論が高まった。和泉氏は道内出身者で、道路沿線の景観を生かした「シーニックバイ

「混乱極めた知事選候補選考」

ウェイ」を仕掛けたアイデアマン。建設業界などからの期待も高かった。

こうした中で、吉川会長や長谷川岳会長代行ら執行部は、党の世論調査で鈴木氏の支持が和泉氏を上回ったことを理由に鈴木氏擁立をこり押ししようとして、和泉氏支持派が強く反発。両派の対立は深刻を極めたが、鈴木氏が1月下旬にいち早く出馬を表明、これを受けて和泉氏も出馬しない意向を明らかにして、結局、鈴木氏擁立が固まった。

候補擁立作業は秘密裏に進めざるを得ない側面はあるが、道連執行部に水面下で道議や市町村長、経済界の有力者に鈴木氏擁立の賛同を得る「寝業師」がいれば、ここまで混乱しなかっただろう。もしくは道連執行部に、かつて「道内自民党ビッグ3」と呼ばれた町村信孝氏、中川昭一氏、武部勤氏のような良くも悪くも「強い力」があれば……

野党側の候補者擁立も混乱を極めた。最強候補」とされた立憲民主党の逢坂誠二衆院議員の説得工作を進めている最中に、同党道連の佐々木隆博代表が同党の鉢呂吉雄参院議員に出馬を要請。鉢呂氏が昨年十二月、自身のフェイスブックに「熟慮している」と書き込み、佐々木代表が取材に「要請ではなく相談だった」と答えると、鉢呂氏は「出馬しないことになりました」と記した。

逢坂氏の説得は年をまたいで続けられたが、不調に終わる。有力候補のあてがなくなった立憲民主や連合の幹部の間では、国民民主党道連の徳永エリ代表、連合北海道の出村良平会長らの名前が挙がり、和泉氏を支持する自民党、経済との相乗り論もあった。最終的に石川氏擁立にたどり着いたが、その直前まで、佐々木代表に混乱の責任を取らせて立候補させる「引責出馬論」さえあった。

知事選は四年に一度必ずあることが分かっているにも関わらず、野党はこの間、何をしていたのか。「道政奪還」を訴えるのであれば、高橋知事四期十六年の道政運営を総括し、その課題解決にふさわしい候補者を選び出す時間的余裕は十分にあつたはずだ。

さらに与野党とも、候補擁立の判断材料は「勝てるかどうか」ばかりで、その候補がどんな政策を実現したいのかについて語ることはなかった。人口減少対策をどうするのか、JR北海道の路線見直し問題、カジノを中心とする統合型リゾート施設（IR）の誘致の是非、泊原発再稼働問題。新知事に託される課題は山積している。十六年ぶりに新知事を選ぶ選挙戦。鈴木氏、石川氏ともこうした問題にどう対処するか、選挙公約にしっかりと掲げ、正々堂々と論戦を繰り広げて欲しい。 八魚V